

11年目の
「忘れられた」
福島

原発事故後、福島県では 「甲状腺がん」になり 人生を変えざるをえなかった 子どもたちがいるのです。

福島県では、2011年の
原発事故当時18歳以下の子ども
約38万人を対象に、被曝により
発症の可能性がある「甲状腺がん」の
検査をしています。

その結果、21年6月までに
約300人が甲状腺がん、

またはその疑いと診断されました。

甲状腺がんになった子どもたち

1人ひとりの人生に、

何が起きたのでしょうか。

彼女たち・彼らは何を感じ、

何を考えているのでしょうか。

甲状腺がんが見つかった子どもたちに

寄り添い取材を続ける

ジャーナリストの白石草さんが

伝えます。

取材・文 **白石草**

(ウェブメディア「OurPlanet-TV」代表)

(甲状腺がんが見つかり、手術・治療を重ねる6人。)
原発事故当時6～16歳で福島県に住んでいた。

「死んだ方が楽かもしれない」
6時間半に及ぶ手術のあと、朦朧と
した意識のなかでそんな思いが
頭をよぎった。るい(25歳・男性・中通り)

6 甲状腺がん になった 人の肖像。

(名前は仮名。地域は震災当時の居住地)

る

いが震災に見舞われたのは、中学2年生の時。揺れは激しかったが、自宅が原発から50キロ離れていたこともあり、原発事故はほとんど意識しなかった。学校が休みとなった3月半ば、友達と自転車で30〜40分かかるショッピングモールに出かけたこともある。街は静まり返っていた。

県の甲状腺検査では、特に問題がなかったが、大学1年の時、旅行先の病院で兄妹と一緒に受けた超音波検査で、がんの疑いがあることがわかった。精密な検査を受けたところ、やはり甲状腺がん。しかも、手術の難しいタイプだという。

「切るしかないのか」。父親は血眼になって情報をかき集め、チエルノブイリで執刀

経験のある医師にたどり着いた。20歳の時のことだ。以来、4回の手術を重ねる。

死を意識したのは2回目の時。がんがリンパ節に散らばり手術は6時間半にも及んだ。長時間、同じ姿勢をしていたために床ずれができ、麻酔が切れてくると、全身に強い痛みを覚えた。痛みを耐えかねてナースコールを押しても、今度は声が出ない。

声を失ったのか。朦朧とした意識の中、「死んだ方が楽かもしれない」。そんな思いが頭をよぎった。退院まで2週間。父親が見舞いに来て、声も出せず、反応することもできない。その姿を見た父親が泣きながら知人に電話していたことを、後で人伝に聞いた。

「前を向いて生きていこう」。そう、気持ち

を切り替えた瞬間がある。病院からの帰路、海沿いを走る列車で、向かいに座る父親の顔を見た時、強い思いがこみ上げてきた。「自分の病気で父親に負い目を感じさせたくない」。

ヘッドフォンから流れていたのは、スウェーデン出身のアーティスト、アヴィーチーの「The Nights」。父と子の絆を描いた曲だ。「限られた時間の中で精一杯生きなさい」「不安になったら父さんはここに

いるからいつでも帰っておいで」。幼い頃に聞いた父の言葉が歌詞に並ぶ。昨年行なった4回目の手術では、声帯や嚥下機能を司る反回神経を切除する寸前だった。アイソトープ治療(放射性ヨウ素内用療法)も受けた。それでも前を向く。

恋愛や結婚は「自分とは関係ないもの」。
手術を受けてから、「普通」に生活する将来
が考えられない。こはく(17歳・女性・浜通り)

こ

はくが幼稚園の年長組の時、震災が起きた。原発から30キロの町から会津に避難したのは、1号機が水素爆発した翌日の13日。だが、当時の記憶はほとんど残っていない。

がんが見つかったのは震災7年目。中学2年の時に受けた県の検査で精密検査が必要と診断され、その後、穿刺(せんし)吸引細胞診で悪性と診断された。がんと告げ

られた時、普段あまり感情を表に出さないこはくが声をあげて泣き崩れた。なぜ、それほど泣いたのかは、憶えていない。

ただ、自分の身体はどうなってしまうのか、治療で学校を休まなければならないのか、不安が押し寄せたという。

「取ってしまえば大丈夫」。その言葉を信じて手術を受けたのは、14歳の誕生日前日。その時は一安心した。

会

うたびに、髪の色や髪形がくる

くる変わる個性的なみつきが震災にあったのは、中学1年生の時。親友は関東に避難し、学校から足が遠のいた時期もある。

がんが見つかったのは、高校2年生の時の検査で9ミリの甲状腺がんが見つかった。腫瘍径は小さいが、皮膜外に浸潤し、リンパ節に転移している可能性もあるという。家族は「早く取ってほしい」と希望したが、「それほど大きくないので半年後に取りましょう」と主治医に諭され、手術は先送りすることに。

8カ月先となった手術は、ちょうど17歳の誕生日と重なった。小さな頃から、誕生日は家族とカラオケボックスで賑やかに過ごしてきたが、この年は味気ないパースデ

再発の告知を受けたのは、成人式の翌日。10カ所以上に転移したがんを切除した傷跡は、耳の下まで広がる。

みつき (24歳・女性・中通り)

2021年2月、東京都多摩川沿いにて。
写真撮影／るいさん

しかし、現実が残酷だった。大学の受験が視野に入ってきた去年8月、切除したはずの甲状腺のリンパ節に悪性の再発巣が見つかった。がんの再発。母親はその事実を受け止めることができず、通院には避難元に残る祖母が付き添った。医師は、全ての甲状腺を摘出する手術が必要だという。結局、クリスマスの前日、2回目の手術を受けた。コロナ禍のため、見舞いは禁止。術後は首が攣り、今も肩や鎖骨の周りには違和感が残る。

今の目標は、公務員になること。そのために、勉強に打ち込む。最初の手術を受けてから、「普通」に生活する将来が考えら

ーとなった。

手術は出血もなく無事終了。ほっとしたのも束の間、主治医は母親にこう言い放った。「なぜここまで放っておいた。再発する可能性がある」。

母親は言葉を失った。手術を先延ばししたのは主治医の方だ。不信感が募った。

それから3年。再発は現実のものとなった。告知を受けたのは、成人式の翌日。振り袖姿で旧友と再会したハレの日から一転、どん底に突き落とされた。

2回目の手術は東京の病院に転院。メスで開くと、がんは10カ所以上リンパ節に転移していた。このため、甲状腺の外側まで大きく切除し、傷は耳の下まで広がった。

れなくなった。恋愛や結婚も、「自分とは関係ないもの」。公務員なら、女性独りでも生活できるし、治療が必要となっても働き続けることができる。

でも、本当に公務員になれるのか。今までのような生活ができるのか。中学生の頃から、不安で眠れない日が増えた。なかなか寝付けない夜は、母親が添い寝をする。それが高校生となった今も続く。

ハマっているのは、男性声優18人が演じるアニメ『ヒプノシスマイク』だ。推しは、長身痩躯でミステリアスな天才医師・神宮寺寂雷。病気になってから「(二次元キャラへの愛着が)強まっている」という。

さらに、がんが再発しないよう、アイソトープ治療を受けることになった。

この治療は、高濃度の放射性ヨウ素を用いる。分厚いコンクリートで覆われた隔離室に滞在し、看護師が小窓から日に3度、食事を差し入れるだけ。外部との接触は絶たれる。

通常の病室に戻ってきたのは4日後。母親は仕事で上京できず、一人で入院生活を耐えた。

彼女は手術で全ての甲状腺を摘出したため、毎日3回、ホルモン薬を服用している。これは、一生のみ続けなければならない。それが一番の苦痛。そうこぼす。

「二十歳まで生きられると思わなかった」。
成人式で「こぼしたひと言が母親の
耳に残っている。あおい」
(26歳・女性・中通り)

高

校生の時に、がんが見つかったあ
おい。医師から「手術しないと23
歳まで生きられないかもしれない」と言わ
れ、3年生の夏休みに手術を受けた。進路
を決める三者面談をしたのも病院。術後は
声がかすれ、授業で当てられるのが怖かつ
たという。それでも大学には、推薦でスミ
ーズに入学した。

しかし喜んだのも束の間、入学直後の健
康診断で血液の数値に異常が出た。再び精
密検査を受けると、医師からがんの再発を
告げられた。肺にも影があるという。
「治っていなかったんだ」。母と二人で泣
き崩れた。当時は、一人暮らしを始めたばか
り。大学と治療の両立は無理だ。治療に専
念するため、大学中退を決めた。わずか4
カ月の大学生生活だった。

甲状腺を全摘した後、今度は、肺に転移し
たがんを叩くため、外来アイソトープ(R
I)治療を2回受けた。しかし効果はなか
った。成人式の時、「二十歳まで生きられる
と思わなかった」とこぼした一言が、母親の
耳に残っている。
治療を再開したのは2017年。福島県

立医科大学附属病院に新設されたR I病棟
に入院し、高濃度の放射性ヨウ素を服用す
る治療を受けた。病棟には、色鉛筆と塗り
絵を持ち込んだ。

通常、R I病棟には私物は持ち込めない。
体内から放出する放射線で汚染されるから
だ。寝間着や下着も退院時に廃棄する。そ
れでも、絵を描くのが好きなあおいは、隔
離中、少しでも気を紛らわしたいと、医師
に了解を取り付けたのである。退院時に廃
棄する条件で。だが、持ち込んだ色鉛筆は
使わずじまいだった。激しい副作用に襲わ
れ、ずっと横になっていたためだ。何回も
嘔吐したが、ナースコールを鳴らしても看
護師は来てくれない。何があっても一人耐
えるしかない過酷な治療。だが、治療の効
果は見られず、3カ月ごとの診察では、腫
瘍マーカーの数値が毎回、気になる。

同じ年に高校を卒業した友達は、3年前
に社会人になった。7年間、治療中心の生
活を送るあおいにとって、正社員になるの
は、夢のまた夢だ。それでも昨春、通信制
の学校に入学し、再び勉強を始めた。夢を
叶えるために一歩踏み出している。

大学時代にかんが見つかり腫瘍は
徐々に成長していった。就職後の治療は
大変だろうと、手術を決めた。

ゆうた (27歳・男性・会津)

東

京のIT企業でシステムエンジニ
アとして働くゆうたは、高校1年
生の時に震災に遭遇した。調理実習中に大
きな揺れが襲い、棚の食器が大きな音を立
てていたことが記憶に残っている。

ただ、原発事故のことはあまり気に留め
なかった。福島第一原発からゆうたが住む
会津までは、100キロほどの距離がある。
浜通りから避難者が押し寄せていたが意識
しなかった。

学校が休みになったため、毎日のように、
自転車で30〜40分かかる大型スーパーやゲ
ームセンターに出かけ、友達と遊びまわっ
ていた。しかも母親には内緒で。

がんが見つかったのは、大学に入ってか
らだ。県の検査でひっきり、大学2年の
夏休みに受けた穿刺吸引細胞診で、乳頭が
んの疑いがあると診断された。

その穿刺吸引細胞診は、がん化している恐れ
のある結節(しこり)に針を刺し、細胞を
吸い取って調べる病理診断の一つだ。麻酔
をせずに喉に針を突き刺すため極めて痛い。
にもかかわらず、医師は2度失敗。

19歳にもなる息子が目に涙を浮かべる姿
を見て、母親は「次の1回で成功してくだ
さい」と声を荒げたほどだ。

不安が高まったのは、がんと告知された
時。だが結節が9・4ミリだったため、経

憧れはバリバリ働くキャリアウーマン。 手術後体調がすぐれず 希望して入った会社も2年で退職。

ちひろ (26歳・女性・中通り)

は じめて、ちひろに会ったのは彼女が19歳の時。ウェーブのかかった明るい色のロングヘアに、ハキハキした話し方。数カ月後に手術を控えているように見えなかった。

中学の卒業式当日に、震災が起きた。家の中は物が散乱し、祖母の家は全壊した。その引越し作業を手伝っている時に、1号機が水素爆発した。

大学は志望していた有名大に進学。だが入学後、体調がすぐれず、体がむくむ。2年上がる頃、心配になって、県の甲状腺検査を受けたところ、甲状腺がんと告知された。その時の母の涙は忘れられない。

医師は聞いてもいないのに、「原発事故とは関係がありません」と言い切った。「なぜそう言い切れるのか」、不信感がわいた。

「娘の首に傷を残したくない」。母親の強い希望で、手術は小さな傷口で済む内視鏡手術を選んだ。手術は成功したが、術後は麻酔の副作用に苦しんだ。全身に管が繋がれ、強い吐き気に襲われる姿は、いつものちひろと同一人物とは思えない。

ちひろが今も涙をこぼすのは、手術時に、1週間も、仕事を休んで病室に付き添ってくれた両親を思う時。一人娘として大事に育てられた。保険適用外の治療を受けたこともあり、金銭的にも大きな負担をかけ、申し訳ないと思っている。

がんと診断される前は、キャリアウーマンとして東京で華やかな仕事に就き、バリバリ働く姿に憧れていた。しかし術後、体調はすぐれず、入社2年目で、希望の職種だった広告代理店を退職。体調を優先する生活に一変した。今は、再発リスクもあり、ホルモン薬を服用する。

これまで努力すれば結果がついてくると思ってきた。今は、「こうなりたい」という前向きな気持ちはわかなくなった。でも、病氣のことで、怒りに囚われたくない。「病氣をしたことで、普通の人と違う経験もできているし、多くの人に支えてもらって、良かったなって思うことが多い」

本来なら「する必要のなかった貴重な経験」を前向きに捉えようとするが、言葉を紡ぐうちに、ボロボロと大粒の涙を流した。

2020年12月、広島県厳島神社にて。

写真撮影／るいさん

過観察することになった。

現在、甲状腺に関する医学会では、最大径1センチ以下の微小乳頭がんのうち、明らかに浸潤・転移のない症例は、非手術経過観察（アクティブサーベイランス）をすることが推奨されている。この対象となったのだ。

しかし、半年ごとの診断で腫瘍は徐々に成長。1年半後には11ミリと、1センチを超えた。母親は、手術せずに済めばと願ったが、医師は手術を勧めた。

ゆうたも、身体の中にがんを抱えている不安が募り、取り除きたい気持ちが強かった。就職後に治療するのは大変だろうと考え、手術することに決めた。

6 甲状腺がん になった 人の肖像。

小児 甲状腺がんは いま

将来を決める重要なタイミングで がん告知を受けた子どもたちは、 「自分の言葉」を取り返す途上にいる。 白石草

しらいしはじめ◎原発事故に関する取材を重ね、放送
ウーマン賞などを受賞。著書に「ルポ チェルノブイリ
28年目の子どもたち」(岩波ブックレット)など。

「誰にも言えず苦しんできました」

これまで固く口を閉ざしていた福島の子が甲状腺がん患者が立ち上がった。この特集で前頁までに紹介した、17歳から27歳の6人が今年1月27日、原発事故による放射線被曝の影響により甲状腺がんを発症したとして、東京電力に6億1600万円の損害賠償を求める訴訟を提起したのだ(311子ども甲状腺がん裁判)。

世界最大のスクリーニング検査で 300人近くが甲状腺がんを診断。

小児甲状腺がんは、もともと年間100万人に1〜2人程度が罹患する極めて希少な病気とされる。チェルノブイリ原発事故後に増えたが、当初は精密な検査によって、潜伏期間中のがんが早めに見つかる「スクリーニング効果」によるものとされた。

しかし、事故後10年目に、日本からチェルノブイリに入り甲状腺の超音波検査を行っていた長崎大学のチームが、原発事故後に生まれ、高濃度の放射性物質に直接晒されなかった子どもからは甲状腺がん患者が増えていないとの論文を発表し、被曝による健康影響が認められた。

さらに事故後20年目には、国連科学委員会(UNSCEAR)なども、線量が増えれば増えるほど、小児甲状腺がんが増える「線量―効果関係」が見られるとして、

事故の影響と認めた。チェルノブイリ原発事故に伴う健康影響として、国際的に因果関係が認められているのは、事故処理作業員や消防士以外では、この小児甲状腺がんだけだ。

こうした歴史的背景を受け、日本政府は福島原発事故が起きた後、甲状腺スクリーニング検査を開始した。主導したのは、チェルノブイリで活躍した長崎大学の山下俊一氏。検査対象は、事故当時18歳以下だった福島県民約38万人。世界最大のスクリーニング検査である。

2011年10月、飯館村や川俣町山木屋を皮切りに、避難区域、中通り、浜通り、会津と線量の高い地域から順番に、2年ごとに実施し、現在は5巡目に入っている。

その結果、現在までに甲状腺がんやその疑いがあると診断を受けたのは、266人にのぼる。このほか、データから漏れている患者が、2017年末までに27人いることが判明しているため、少なくとも、この10年に293人の甲状腺がんが見つかったことになる。

この人数が、通常のがん統計をもとに推計した有病率と比べて、「数十倍高い」ことは、国や福島県も認めている。しかし、福島原発事故による被曝線量は、チェルノブイリと比べてはるかに低いなどとして、被曝との因果関係は否定。精密な検査により、治療の必要のないがんを多数見つけている「過剰診断」が起きている可能性

を指摘する。

だが、今回の原告は6人中4人が再発し、甲状腺全てを摘出しており、原告の弁護士は「過剰診断」はありえないと主張する。被曝以外の理由があるなら、東京電力が立証すべきだとの立場だ。

タブー視される中、相談もできずに 患者家族は孤立が進んでいた。

筆者が、福島県出身の小児・若年甲状腺がん患者とはじめて会ったのは、2016年3月だ。2014年秋には、前述の県民健康調査で、すでに100人を超える甲状腺がん患者が報告されていたことを考えると、ずいぶん遅い。

2013年から3回にわたってチェルノブイリを取材した筆者は、原発事故による健康影響について調べるためには、小児甲状腺がんの全容を知ることが欠かせないと感じていた。

だが、患者に「出会う」ことは容易ではなかった。当時、すでに福島県は復興一色に染まっており、「甲状腺がん患者」は、それに水を差す存在として扱われていたからだ。メディアが「甲状腺がんが増えている」と報道しただけで、苦情やバッシングが殺到する。そんな社会状況だった。まして被曝影響と結び付けて語ることはタ



プー視され、封じ込められてきた。

患者と家族はこうした空気の中、子どもががんに罹患するという一大事を、誰に相談することも、助けを求めすることもなく、家族だけの秘密にして、ひっそり暮らしてきた。「なぜうちの子は、甲状腺がんになったのだろう」「原発事故が原因ではないのだろうか」。こうした疑問を心のうちにしまっただけだ。

小さな手がかりをもとに、少しずつ患者家族との接点が生まれたが、関係が浅かった頃は、こうして封じ込められてきた言葉や、その裏に隠された深い絶望と孤独感に接するたびに、やるせない気持ちに駆られ、眠れない日が続いたことを、昨日のことのように思い出す。

福島の小児甲状腺がんは転移が多く、再発も少なくない。

若い患者と直接、会う場所はいつも病院だった。診療に不安を抱いた母親からの要望に沿い、通院に同伴する機会が増えたからだ。

多くの患者が手術を受けている福島県立医科大学附属病院では毎週火曜日の午前中、甲状腺検査でB判定(※)を受け、精密検査を受けにくる子どもやすでに手

術を受けた子たちであふれていた。当時、甲状腺・内分泌科は、古く薄暗い病棟の2階の端にあり、廊下の長椅子に若い患者がたくさん座っていた。中学校のジャージを着た子や制服を着た子もいた。

子どものそばには両親だけでなく、祖父母も駆けつけている家族もいる。家族の宝である子どもががん、しかも、被曝影響かもしれない甲状腺がんの恐れがあると知った時の不安はどれほどのものだろう。

福島県立医大はいつも混雑していて、朝8時すぎに来院し、血液検査を受けても、診察までは何時間も待つ。誰も声を発することのない静まりかえった廊下には時々、患者を呼ぶ医師の声が響く。待つ時間に比べて、診察時間はずか数分。しかも、医師と患者の関係性は対等ではない。疑問があっても医師に質問をぶつけることができず、不安にかられて診察後に涙を見せる家族もいた。

現在、甲状腺がんは、「死に結びつかない」などと軽視される傾向があるが、福島県で見つかっている小児甲状腺がんは、多くがリンパ節転移を伴っており、再発も少なくない。

福島県立医大で多くの手術を執刀している鈴木眞一教授の報告によると、2018年12月末までに最初の手術

をした180人のうち、9人に肺転移、1人に骨転移の疑いがあるという。手術症例のうち5%以上で遠隔転移が起きている計算だ。

政府の不誠実な態度に対して、提訴を決断した6人の若者たち。

「原告は、将来像を描けない精神状況になっている」そう話すのは、原告の弁護士を務める井戸謙一弁護士だ。井戸弁護士は2006年に、北陸電力志賀原発の運転差し止め判決を書いた裁判長として知られる。

筆者はこの6年で、十数人の甲状腺がん患者とその家族と接触してきたが、将来を決める人生で最も重要なタイミングでがんを告知されることの残酷さを肌で感じてきた。日本という国は、病気でなくとも、生きづらさを感じている人が多く、そもそも将来像を描きにくい。子育てでも困難で、親の負担は大きい。そこに、がんという病が襲いかかっているのだ。

ところが、10〜20代前半の若い世代は、親の世代以上に、多くを語らない。不安も表さない。親との関係も様々で、本心を探るのは難しい。むしろ、多くの場合、親に心配をかけまいと明るく振る舞い、自身の心の中を覗くことを避けてさえている。

それでも、今回の6人は、提訴を決断する過程で、自分の考えや言葉を探り当てつつあるように感じる。より困難な患者を知る中で、より広い目で、問題を捉えることができるようになったからに違いない。

「自分と同じような境遇で苦しんでいる人の希望になれたら」「被曝との因果関係を明らかにして、現状を少しでもよくできたら」

「甲状腺がん問題」をめぐる、政府がこぞって不誠実な態度を取る中、10〜20代の若者がそれに抗い、裁判に訴えるのは、並大抵のことではない。6人は今、同じ境遇の仲間とともに、奪われていた「自分の言葉」を取り返す、その途上にいる。

「311子ども甲状腺がん裁判」とは？



写真提供／本野龍逸

東京電力福島第一原発事故と小児甲状腺がんとの因果関係を争点に被害者への補償を求める、住民による初の集団訴訟です。多くの患者が差別や偏見を恐れ孤立してきました。上げられなかった声をすくい上げる、一歩でもあります。

カンパのご案内

この裁判を支援するため、「311甲状腺がん子ども支援ネットワーク」で寄付を募っています。詳細はウェブサイトをご参照ください。

<https://www.311support.net>

【振込先】城南信用金庫
九段支店 普通 355663

【名義】311甲状腺がん子ども
支援ネットワーク

(サンイチイコウジョウセンガンコ
ドモシエンネットワーク)

この記事は、カタログハウスが発行する
「通販生活」22年夏号に掲載されました。

デザイン／竹井 賢 写真撮影／吉崎貴幸



通販生活の定期購読は、通販生活の
ウェブサイトからお申込みいただけます。
<https://www.cataloghouse.co.jp/company/catalog/>

